

企画委員から

五十にして学に志す？

こばやし てつや
小林 鉄也

●NTT労働組合 企画組織部長・情報宣伝部長（兼務）

私事で恐縮だが、齢五〇を過ぎ数年が経過した。ここ数年間で私を取り巻く環境は大きく変化した。その一つは、三年前に人事異動に伴い居住地である愛知県から東京での単身赴任となったことだ。単身赴任は以前にも四年間の大阪経験があり、不安はなかったものの、その当時は二歳だった一人息子が新幹線に乗る際に「パパー」と涙を流していたことが懐かしい。しかし、東京異動時には息子も中学生となり、パートナーともに「寂しい」などの言葉はなく、「東京遊びに行くから泊めてよ」と前向き？に私の単身赴任を祝ってくれた。

私自身の楽観的な性格もあり、今まで経験したことのない職場であったが「何とかなるだろう」と安易に考えていたが、いやいや今まで経験したことのない環境での任務は、想像よりも難しい面もあった。任務が続けられたのは、「あの人は心配だから、ほっとけない」と周囲の皆さんが支え続けてくれたからだろう。改めて、我が組織の皆さんの優しさを痛感した東京生活である。

もう一つの変化は、これまで以上に健康面での不安が増したことだ。年一回の「人間ドック」では、年々C～E判定が増加傾向にある。家族との同居と比べると、不規則な生活になりがちなのか、健康不安は以前より増した気がする。検診結果のみならず、心当たりがないのに膝を負傷する等、これまで数少ない取柄だった「健康」に対しても、不安が増したと思う。身体的な健康に不安を感じ

始めると、やや将来を不安視する傾向が増したと思う。巷では、これらの兆候を「ミッドライフ・クライシス（中年の危機）」と呼び、子どもの自立や介護等の環境変化で、四〇～五〇世代の多くが心身面の不調を感じるという。

同世代に関わることなので、「ミッドライフ・クライシス」に関心を持ち、新聞やネット記事を読み漁った。経験談では「大変しんどい思いをした」と語る一方で、「これらの心身面の変化は、今後の人生を前向きに過ごす為の『転機』と捉え、これまでのライフスタイルを見直すなどのきっかけにしてほしい」との専門家のアドバイスも紹介されていた。論語のように五〇歳になって、「天命」を知り、迷うことなく日々を過ごしている人ばかりではなく、日々葛藤しながらも前を向いて歩んでいる同世代が多いことを知り、私自身も勇気を貰えたと感じた。

私自身は五〇代前半だが、「自分ではできないこと」が沢山あることを学んだ時期でもあった。一方で、一人ではできなくても職場の同僚や上司等の支援で前進することができることを実感できた貴重な期間でもあった。「一五にして学を志す」ではないが、年齢による限界を定めず「新たなことを学ぶ」ことに意欲を持つことができたと思っている。現在の役割をいつまで担うか分からないが、沢山の人と出会い、色々な経験を積もうと、気持ちを新たにしている。